

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には「珠玉の短篇」という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画には見られない別の優れた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って2時間前後の番組を編成して、来る8月から原則として毎月第一土曜日（8月のみ第二土曜日）の午後1時から短篇・文化・記録映画特集番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。「土曜特集」と全館入替え制になります。

一般200円 学生140円 小人100円

8月12日(土) 午後1時開映

——伝統工芸シリーズ——

和菓子

桜映画社1965年作品

企画＝栄太郎総本舗 製作＝村山英治、高島道吉、監修＝岡田譲、守安正、辻嘉一 脚本＝村山英治、松川八洲雄 監督＝米内義人、木塚誠一、村山英治 撮影＝木塚誠一 照明＝菱沼誉吉 音楽＝岡宮芳生 解説＝久米明 カラー 26分

〈かいせつ〉

和菓子独特の世界を歴史の流れをかりて描いたもので、餅に始まって饅頭、蒸しようかんを経てだんご、大福餅、きんつばなどにいたる日本の菓子の生い立ちを美しいカラーの映像を通して解明表現したものの。

伝統工芸——わざと人

記録映画社1966年作品

企画＝文化財保護委員会 脚本＝北条明直 演出＝上野耕三 撮影＝金山富男 カラー 21分

〈かいせつ〉

長い年月をかけて民衆の生活の中から人々のたゆまざる努力と工夫によって作りあげられてきたわが国特有の工芸の現状を示すもので、人間国宝級の名匠たちの創作過程を通して伝統工芸そのものもつ性格や特徴を把握しようとしており長い修練に培われた独自の芸術的感覚と生命力が息づく様相が見事にとらえられている。

松本城

記録映画社1968年作品

企画＝文化財保護委員会 製作＝古川正男 構成・編集＝北条明直、藤井敏貴 撮影＝藤井敏貴 音楽＝武田俊一 録音＝草間良之 解説＝棟方宏一 白黒 29分

〈かいせつ〉

1950年から1955年まで約6年の歳月をかけて行なわれた松本城の解体復元工事の記録フィルムをもとに、城の内部構造を明らかにするとともに、先人たちが築城工事にあたって用いた様々な智恵と工夫のすばらしさをしのぼうとするもの。

狂言

岩波映画製作所1969年作品

製作＝高村武次 脚本・演出＝羽田澄子 撮影＝西尾清 照明＝伴野功 録音＝安田哲男 解説＝奈良岡朋子 出演者＝野村万蔵(瓜盗人)、茂山千作(千鳥)、野村万之丞、野村万作、茂山千五郎、茂山千之丞 カラー 37分

〈かいせつ〉

狂言発生の歴史につながる各種の民俗芸能から、瓜を盗みにきた男を百姓が案山子に化けてこらす《瓜盗人》を中心に《千鳥》《宗論》《葺》など、数多くの演目の見せ場をくりひろげ、狂言の内容の多様性と芸風の幅の広さをみせてくれる。

9月2日(土) 午後1時開映

——日本の自然シリーズ——

刈干切唄

記録映画社1959年作品

企画＝貯蓄増強中央委員会 脚本・監督＝上野耕三 撮影＝金山富男 録音＝金谷常三郎 白黒 41分

〈かいせつ〉

九州の宮崎県高千穂地方の山村。この辺では山を焼いて畑とする千年の昔からの農耕法が今でも行なわれている。秋になるとこの地方でくりひろげられる刈干切りの風景が、独特の民謡を混えて詩情豊かにとらえられている。特に、こゝで唄われている刈干切唄は九州地方らしい男性的な節廻し、夏の夕方に響く中に、しっとりとした日本の寂寥がひめられていて独特の味わいをもっている。

北海道の大自然

東映1964年作品

製作＝大川博 企画＝山崎季四郎、赤川孝一 撮影＝松田定彦、並川達雄 編集・構成＝岩佐氏寿 音楽＝長沢勝俊 解説＝杉山真太郎 カラー 37分

〈かいせつ〉

流水が融け始めた4月の知床半島の春の草花の開花から始まって風船岩のトドの群、北西岸の天売島のウミウ、カモメ、ウミガラス、夏の大雪山中の数々の高山植物、珍しいナギウサギや数千頭はいるといふヒグマ、釧路に近い丹頂鶴の棲息地、秋の終り頃の風蓮湖のオオハクチョウの群など、北海道でなければ見れない大自然の珍しい風物をとらえたもの。

山ノ辺の道

東京文映1969年作品

企画＝天理市 製作＝慶光院美沙子、土屋祥吾 脚本・監督＝米内義人 撮影＝豊岡定夫 音楽＝菊地俊輔、解説＝城達也 カラー 28分

〈かいせつ〉

大和平野の東端、天理市の北から桜井市にかけてなだらかな丘陵沿いに続いている一本の山道。現在に残る日本最古の道、山ノ辺の道を通して大和平野に刻みこまれた長い歴史と貴重な文化財を描きだしている。

京都の川

英映映画社1971年作品

企画＝近畿日本ツーリスト 監修＝樋口清之 製作＝高橋銀三郎 演出＝青山通春 撮影＝宮下英一、長井貢、千葉寛、江原正雄 音楽＝真鍋理一郎 録音＝赤坂修一 解説＝竹内三郎 製作担当＝滝川正年 カラー 34分

〈かいせつ〉

京都を育て長い歴史をはぐくんだ川、鴨川、桂川、宇治川、木津川などの流れに沿って、それらの沿岸に残る数多い遺跡を整理しながら、千数百年にわたって京都地方に展開された人間の歴史の跡を探ってみようとするもの。

10月7日(土) 午後1時開映

——戦前の秀作シリーズ——

蟬の一生

十字屋小型映画部1936年作品

監督＝太田仁吉 白黒サイレント 15分

〈かいせつ〉

十字屋小型映画部は『石油の話』を第一篇とする理科教材映画を1934年から製作し、『理科映画大系』として1939年まで25篇27巻を完成した。この『蟬の一生』は『理科映画大系』の第7篇として製作されたもので、夏の風物詩の素材の一つを構成しているともいえる蟬が、卵から幼虫にかえって地の中にもぐり、7年から8年の幼虫時代を経て夏の夕方、地上に出て樹の上で成虫になるまでの蟬の一生を描きだしている。

雪国

芸術映画社1939年作品

製作＝大村英之助 監督＝石本統吉 撮影＝橋本竜雄、井上莞、竜神孝正、黒瀬進、成田勉 進行＝小山良夫 監修＝日本雪氷協会、日本芸協 指導＝農林省積雪地方農村経済調査所山口弘道 白黒 43分

〈かいせつ〉

毎年10月の終り頃から翌年の4月の初め頃まで約半年間にわたって降り積った雪の中で生活することを余儀なくされている山形県新庄地方の雪国に住む人たちの生活をいろんな角度から描きだしたものの。昭和14年度文部大臣賞と日本映画監督協会賞を受賞している。

娘々廟会

満鉄映画製作所1939年作品

撮影＝藤井静 編集＝芥川光蔵 解説＝中村伸郎 白黒 20分

〈かいせつ〉

中国東北地区に住む人たちのあつい信仰をあつめている娘々廟は、東北地区各地にあるが、この作品に紹介されている大石橋郊外迷鎖山の祭は一番賑やかであるといわれており、春が訪れると、各地から農民たちが幌馬車にゆられながら百里の道もいとわず集ってくる。その有様が沿道に並んだ見世物小屋や屋台店などとともに親愛の情をこめて描きだされている。

或る日の干潟

理研科学映画1940年作品

演出＝下村兼史 撮影＝佐藤時雄 白黒 20分

〈かいせつ〉

望遠レンズを駆使して海辺に住む生物や鳥類の生態を辛抱強く撮影し、わが国の生物生態記録映画として画期的な成功を取めた余りにも有名な作品。千葉県行徳海岸や九州有明湾に2年がかりのロケ撮影を行ない、遠浅の干潟に住むフジツボ、カキ、ニナ、シャコ、カニ、トビハゼ、千鳥、シギ、小サギ、雁、鴨、鷗、雉などの生態が見事にとらえられている。昭和15年度文部大臣賞受賞。

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌が見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には「珠玉の短篇」という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会史的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画には見られない別の優れた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って2時間前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入替え制になります。

一般200円 学生140円 小人100円

11月4日(土) 午後1時開映

——明治を偲ぶ——

明治の日本

1960年2月29日、当時のフランス文化担当国務大臣アンドレ・マルロー氏から寄贈されたフィルムである。巻頭のタイトルにはジュレールの撮影によると記されているが、これはシネマトグラフ・リュミエールの一般公開で大成功を取めたルイ・リュミエールが、1896年初めにプロミオ、メスギシュラ大勢のカメラマンを養成して、世界各国に派遣し、シネマトグラフ・リュミエールの宣伝とフィルム撮影を行なわせていたので、その中の一人ジュレールなるカメラマンが日本に派遣されて撮影したものである。

旅順開城と乃木将軍

英国—アーバン社1905年作品

撮影=ジョー・ローゼンタール
白黒13分

〈かいせつ〉

明治37、38年の日露戦争中の数々の会戦の中での一際有名な乃木希典大将指揮下の第三軍による旅順攻撃の様相を記録したもので、水師督の会見に臨む乃木将軍とステッセル将軍がや、不鮮明なロングショットではあるが、ムービーとして見られる点では貴重な記録映画である。撮影に当たったローゼンタールは、今世紀初頭から南阿戦争など世界各地の戦場に赴いて戦場場面を撮影したプロのカメラマンとして知られている。

明治村

文芸春秋1975年作品

監修=谷口吉郎、土川元夫 脚本=植草圭之助 監督=ト部改司 撮影=中村富哉 音楽=三木稔 協力=財団法人博物館「明治村」、京都映画株式会社、日本映出版株式会社 カラー 40分

〈かいせつ〉

愛知県犬山市郊外、入鹿池のほとりにある敷地50万平方メートルの明治村は、国の重要文化財8件を含む40余件の建物を収容した日本には珍しい雄大な野外博物館で、こゝに保存されている数々のユニークな建物を通して、新しい文化に立ち向ったひたむきな明治気質を偲ぼうとするもの。

三代の嫁たち

共立映画社1971年作品

製作=小野国三、栗山富郎 脚本=野田貞吉 監督=金子精吾 撮影=藤井敏貴 音楽=浜坂福夫 解説=小林恭治 白黒30分

〈かいせつ〉

鳥取県のほぼ中央にある日本海に面した砂丘の町北条町。その殆どが兼業農家といわれる農家の人たちの努力で、町の三分の一を占める砂丘を耕地に変えることに成功したが、その際にはこれまで「嫁ごろし」といわれた苛酷な労働に耐えてきた農家の主婦たちの町の公民館を礎とした地道な活動があったことをとりあげたもの。

12月2日(土) 午後1時開映

——くらしのちえ——

はかる

岩波映画1973年作品

企画=科学技術庁 プロデューサー=高橋広暢 脚本・監督=堀越慧 撮影=中谷英雄 録音=尾形重平 解説=笠井三根夫 カラー 25分

〈かいせつ〉

地球の大きさとか、海の深さとか、光の速さとか、さまざまなものか計られ、数字として発表されています。こういったものはどのようにして計られたか、また、ものを計るといふことはどういう意味を持っているかを探ってみようとしたもの。

うつわ——食器の文化

グループ現代1975年作品

監修=宮本常一 企画=姫田忠義、日本観光文化研究所 製作=小泉修吉、宮本千晴 製作補=小松ゆき 脚本・演出=姫田忠義 撮影=伊藤碩男、沢橋正範 音楽=林光 解説=糸博 カラー 41分

〈かいせつ〉

われわれ日本人が日常生活の最も身近な用具として使用している〈うつわ〉の源流をたずねて、南は沖縄から北は北海道まで日本各地を歩き廻り、さまざまな素材や技法を総合しながら、〈わん〉や〈膳〉を軸にした日本独特の食器文化が長い年月をかけて形成されてきたあとをさぐるうとするもの。

京に生きる味

電通映画社1975年作品

制作=山本勝久 脚本=麻有喜子、山根淳 監督=久保恵三郎 撮影=西居資夫 照明=湊和雄 音楽=小杉太一郎 解説=森本毅郎 編集=三谷晴茂 録音=井延順一 協力=京都料理組合、京都料理芽生会、武者小路千家 カラー 40分

〈かいせつ〉

王朝文化が花ひらいた千年の昔から、京の庶民の暮しの中で洗練されてきた京料理。季節、季節の材料を厳選し、材料の持ち味をできるだけ手を加えずに引き出す京料理の真髄を美しい映像でとらえたもの。

1月6日(土) 午後1時開映

——伝統芸能——

猿楽と壬生狂言

電通映画社1976年作品

制作=山本勝久 脚本・演出=鈴木一夫 撮影=西居資夫 照明=湊和雄 編集=三谷晴茂 音楽=牧野由多可 録音=井延順一 ナレーター=中西電 協力=壬生寺、春日大社、住吉大社、京都能楽協会、総本山聖護院門跡光崇講、法金剛院 出演=壬生大念仏講中 カラー 30分

〈かいせつ〉

まだ土の匂いを失なわない無言劇である伝承の壬生狂言は、剽軽洒脱な持ち味と高度の物真似術でもって庶民の哀歓を猫き、人生の機微にふれ、人間真実をえぐる迫真の演技が見ものだが、そういった壬生狂言を通して日本の芸能の源をさぐるうとするもの。

文楽

日映科学映画1969年作品

企画・監修=国立劇場 指導=山田庄一 製作=高田清文 脚本=藤原智子 演出=中村麟子 撮影=高山富雄 照明=鈴木忠一 録音=甲藤勇 音楽=中村準一 解説=山川静夫 カラー 31分

〈かいせつ〉

能、歌舞伎と共にわが国が世界に誇る三大舞台芸術の一つである文楽も、〈古臭いもの〉という先入観のもとに若い人たちが敬遠されがちだが、そういった〈文楽と無縁な若い人たち〉に、文楽で大きな比重を占める義太夫節を中心に文楽のすばらしさを理解してもらおう狙いで作られたもの。

雪

鹿島映画1971年作品

製作=岩佐氏寿 構成=岩佐氏寿、瀬藤祝 撮影=黒田清巳、佐藤昌道、長岡隆昭 照明=沖茂 美術=北川勇 録音=岡崎三千雄 出演者=武原はん 三味線=富山清琴 琴=富山美恵子 カラー 15分

〈かいせつ〉

浮世を離れ、尼となった妓女をうたったもので、寒い夜の独り寝に世を捨てた身ながら昔を思い、つれなかつた男のことを怨み、男の罪業を悲しむ述懐の形をとった地唄舞「雪」を武原はんが舞うのを撮ったもの。

祇園

電通映画社1973年作品

制作=山本勝久 脚本・監督=岡野貞明 撮影=有家敏 照明=植村他家彦 編集=三谷晴茂 音楽=富田勲 録音=井延順一 ナレーター=齋藤順 協力=祇園甲部組合 祇園甲部芸妓組合、学校法人・八坂女紅場学園 カラー 22分

〈かいせつ〉

やわらかい京ことばに気品のある身のこなし、花やいだ芸の世界、舞妓たちや芸妓たちの美しさに彩られた、京都にあってもひときはみやびな界隈祇園の内側の風景をさぐり、そこに息づく伝統をとらえようとしたもの。

短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には「珠玉の短篇」という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画には見られない別れた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って2時間前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観覧者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1979年2月 フィルムセンター

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入替え制になります。

一般200円 学生140円 小人100円

2月3日(土) 午後1時開映

——世界を見る——

日中間海底ケーブル

岩波映画製作所1976年作品

企画＝KDD国際電信電話株式会社 製作＝堀谷昭 脚本＝吉原順平 演出＝北條美樹 撮影＝中谷英雄、三角善四郎、根岸栄 照明＝宗田武久 録音＝久保田幸雄 音楽＝戸田政孝 解説＝大木宏 カラー 30分

〈かいせつ〉

1976年5月から6月にかけてわが国の天草・苓北と中国の上海市南匯とを結ぶ全長およそ850キロメートルの東シナ海海底ケーブル(電話480回線)の敷設工事が行なわれたが、その工事の様相を記録したもの。ケーブルのルートとなる東シナ海西側は全体に水深が浅く、その上トロール漁業のメッカとなっているので、敷設に当たっては漁船が引く底引網や錨からケーブルを保護し、かつ、ケーブルが漁業に支障をきたさないよう九州沖の深海部以外はケーブルを海底に埋める埋設工法を採用したり、水温の変化に対する対応策や信号の減衰を防ぐ中継器を設けて増幅するなどの工夫が施されている点を一般の人にも判りやすく説明している。

モンパサ国際空港

シブイ・フィルムス1977年作品

企画＝三菱商事、竹中工務店、竹中土木 製作・演出・撮影＝狩宮篤 脚本＝高森茂 音楽＝原田甫 解説＝城達也 録音＝本間喜美雄 カラー 22分

〈かいせつ〉

東アフリカ・ケニア共和国の首都ナイロビから東南500キロメートル、インド洋に面した古い港町モンパサにこの国で初めての国際空港が建設され、その経過を1974年4月の契約調印から76年10月の一番機の着陸まで、3350メートルの新滑走路の工事を中心に3年間にわたって記録したもの。工事記録を主体にしてこの新興国のさまざまな面をとらえ、国作りに張切っている姿を印象的に描きだしている。

水のある沙漠

——イラン——

鹿島映画1973年作品

企画＝鹿島建設株式会社 製作・脚本・演出＝岩佐氏寿 撮影＝大野洋 演出助手＝砂川孝夫 音楽＝富田勲 効果＝大野松尾 カラー 36分

〈かいせつ〉

昔ペルシャと呼ばれた国イラン北部のカスピ海沿岸地帯は豊かな農村が広がり、沙漠のオアシス都市として発展した首都テヘランは、5000メートル級のエルブス山脈の雪解け水を利用した緑と水の美しい近代都市であるが、テヘランを一步出ると全く不毛の沙漠である荒涼としたイラン高原が果てしなく広がる。そこでは、水がいかに貴重な存在であり、古くからの歴史が水との戦いであったかをペルシャ人の偉大な生活の知恵から生みだされたカナートと呼ばれる地下水路を中心にして描きだしている。

母たち

藤プロダクション1967年作品

企画＝プリマ・ハム 製作＝工藤充 監督＝松本俊夫 撮影＝鈴木達夫 録音＝片山幹男 音楽＝湯浅譲二 詩＝寺山修司 朗読＝岸田今日子 カラー 30分

〈かいせつ〉

アメリカではニューヨークのハーレムに住む黒人の母親、フランスではバリの平和なサラリマンの若き母親、ヴェトナムではメコン・デルタの戦争下で生きる母親、アフリカでは新興国ガーナの母親と、それぞれ人種や皮膚の色が異なり、違った社会的背景や生活条件の下に生きる母親たちの日常生活をきめこまかに描きだしながら、それらの母性像の間に貫して見られる母親の愛の姿を詩情豊かに謳いあげたもの。

3月3日(土) 午後1時開映

——動物の世界——

小湊のオオハクチョウ

三和映画社1973年作品

企画＝松緑神道大和山、田沢康三郎 監修＝和田千蔵 監督＝野崎健輔 撮影＝白川栄造、山口典昭、原田英昭 音楽＝寺島尚彦 解説＝和田篤 カラー 25分

〈かいせつ〉

今では特別天然記念物に指定されている青森県平内町小湊に飛来して越冬するオオハクチョウが飛来して飛去するまでの5ヵ月間にわたってその生態とそれを観察する浅所小学校の小学生たちのクラブ活動の様相を記録したもの。昭和30年頃はノリの養殖の妨げになると漁民たちに排撃されたが、浅所小学校の学童たちによる餌つけに成功し、以来その仕事は17年間にわたって上級生から下級生に引きつがれ、産業と自然保護とが見事な調和を示すようになった経過が興味深く描きだされている。

ひなにとって親とは何か

学習研究社1975年作品

製作＝原正次、石川茂樹 プロデュース＝岡田泰明 監修＝浦本昌紀 脚本・演出＝江藤征治、浅井晴夫 撮影＝秦吏志、八木正次郎 撮影補＝山下幸男 選曲＝宮下滋 解説＝和田篤 カラー 20分

〈かいせつ〉

人工孵化されたアヒルの雛は、生まれて初めて見た動く物体に惹きつけられ、その後を歩いて歩くというのがオーストリアの動物学者コンラート・ローレンツの(すりこみ)理論で、近年俄かに注目されるようになったこの動物の行動学をとりあげた映画である。動物行動学に対する関心をそえられると同時に自然界の不思議な仕組みについていろいろと考えさせられる興味深い作品である。

ニホンザル

——その群れと生活——

東映教育映画部1969年作品

企画＝神英彦、布村建 監修＝河合雅雄、吉場健二 脚本・構成＝酒井修 撮影＝村山和雄 音楽＝愛場俊彦 解説＝川久保潔 現地指導＝三戸サツエ、時任岩助 カラー 35分

〈かいせつ〉

宮崎県の日南海岸の南、都井岬の近くの幸島(こうじま)は昔から野生のニホンザルが自然のままの純粋な形で群棲している島として知られているが、この島に生息するニホンザルの自然社会に生活の様相を、群の構造・母子関係・子ザルの心身の発達過程・文化的行動・リーダーと群の関係などに重点をおきながら長期間にわたって観察記録したもので、サル生態についての数々の興味深い一面が捕らえられているのが印象的である。

奄美の森の動物たち

——自然をさぐる——

桜映画社1976年作品

企画＝日本学術振興会 製作＝村山英治 原案＝佐々学 演出＝村山正実 撮影＝小林一夫 撮影協力＝鈴木博 音楽＝深沢康雄 解説＝滝田裕介 カラー 27分

〈かいせつ〉

奄美、沖縄を含む南西諸島は極めて古くから大陸と日本列島から隔離されているため、アマミノクロウサギやリカケスなど大陸でも日本でも見られない特異な動物が棲息していたが、開発によって原生林は次第に傷つけられ、現在では奄美の湯湾岳頂上付近に押しやられている。奄美、沖縄に多い特有の動物に起因する風土病の対策研究のために設立された奄美病害動物研究施設の常駐研究員となった科学者鈴木博氏の四年間にわたる夜行性動物の生態観察を記録したもの。氏が考えだしたユニークな生態観察方法によってカメラに収められた珍らしい動物の生態は学術的にみても貴重な価値あるものと高く評価されているという。